

松山幸生先生講述

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全32回--23

2023年06月

写者

小原靖夫

第23回 信仰の先達として証しされた人びと③

天にある故郷を目指して歩む

第11章⑬節から⑯節 信仰

- ⑬この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。
約束されたものを手に入れませんでした、
はるかにそれを見て喜びの声をあげ、
自分たちが地上ではよそ者であり、
仮住まいの者であることを公に言い表したのです。
- ⑭このように言う人たちは、
自分が故郷を探し求めていることを明らかに表しているのです。
- ⑮もし出て来た土地のことを思っていたのなら、
戻るのに良い機会もあったかもしれません。
- ⑯ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。
だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいません。
神は、彼らのために都を準備されていたからです。

この手紙の第11章は「信仰」という問題を取り上げ、「信仰とは何か」、「信仰に生きるとはどういうことか」について書かれていました。④節からしばらくは先ず、アベル、エノク、ノアといった人びとについての信仰が書かれ、そして⑧節から後は、族長時代のアブラハム、イサク、ヤコブについての信仰、更にモーセというように、出エジプトにおける信仰の行為についても語っています。

特にアブラハムについては「あなたの故郷を捨てて旅立ちなさい」という神の御言を信じて、ハランの地から出発し、更に神の御命令に従って、神の奇しき御業においてお与えくださった独り子イサクをさえ「神の御言であるならば」と信仰においてお献げしました。

私たちが信仰という問題を考えていく時に、こうした「神の御言、神の呼びかけ、神の要求に、私たちが徹頭徹尾どう応えるか」ということが、「信仰が『あるか、ないか』を決定づける」ということを、この手紙では中心的柱としてに語っております。

「すべてを御存じであり、すべてを御支配しておられる御方、万物を創造なさり、万物を保ってくださる御方、その御方が私たちの神である。だから、その御方の御言こそが唯一の真理である」という信仰のバックボーンをしっかりと踏まえていないと、神の御言に従う際に非常に戸惑い躊躇が生じたり、「いったい神の御言とは何なのか」となどと切り返して、理屈をこねたりする羽目になるわけです。

「自分が生きていること自体、実は、神の御言がそこにあることなのだ」と、著者はその信仰の問題について、とてもシリアスな提言をしています。そして「あなた自身が神の御言を信じていることが、あなたが今生きていることとイコールになっていますか」と心に問いかけられますと、なかなか「はい」とは即答できないのです。

御言なる神は確かに生きておられますし、私も生きています。そして「この私と神の御言との間」には、ときに隔たりが生じたり、ときに食い違いが生じたり、ときには非常に親密にということも生じますが、そうした「両者がイコールで結ばれたり、結ばれなかったりする現実」が「私が生きているという証拠」なのではないかと思うのです。

ところが、この手紙では、そんな曖昧なことではなくして、「私が生きていることイコール神の御言が生きていること、私が存在していることイコール御言なる神が存在していることなのだ」という非常にはっきりとした提言を為しているのです。だが、何を根拠に、そんな断定的な物言いができるのだろうか。

アブラハムは、確かに彼を招かれた神の御言に従い旅立ちました。唯、神の御約束を信じて出発したのです。ところが、そこから彼の前に展開されていった現実は、彼が期待したこととはかけ離れていた。神は「約束の地、本当に豊かに暮らせる土地に導いてやろう」と仰ったけれど、現実には、彼は羊を連れて遊牧しなければならなかった。しかもそこでの生活は、豊かに水があって牧草が生い茂っているというわけではなく、甥ロトとの間には遊牧の領域について、絶えず論争やもめごとが生じるという実態があったのです。

神は確かに「わたしの示す地に行きなさい、豊かにわたしが祝してあげるから」と仰いましたが、その御約束は、彼の目の前では実現されなかった。「しかし、アブラハムは神の御言を信じた」。これは、いったいどういう意味なのでしょう。

アブラハムには「神の御約束は、御心において既に実現しているという信仰」があった。それにより、「今自分が歩んでいる歩みは、その延長上において神に賜わるものをお受けするまでの行程だ。その道のりのために、神が自分たちを訓練し調べてくださる今の日常があるのだ」と、その過酷な現実を前向きに捉え、神の御言を真摯に受け止めたのです。

こうした「神に相応しい者とされるための訓練の場として『現実』を受け止めてゆく」というひたすら神へと向かう姿勢が、信仰の父アブラハムのうちに見られるのです。

それに比して私たちは、色々なケース、色々な場面において神が提供なさる激しい試練の嵐が過ぎ去り収まって、平らかな息ができるようになった処ではじめて言えるんです、「あれは神の訓練の時だったんだよ」と、それがまるで何事でもなかったかのように。試練を受けている最中は「神様、何でこんなとんでもないことを、なさるんですか!」と、あんなに悲鳴を上げ続けてきたのに・・・。

しかしながら、神は自分に対して絶対に不都合はなさらないという「アブラハムの信仰」を持っていたならば、そんな悲鳴は決して生じなかったはず。「自分たちはこのようにして今は恵まれ祝福を頂いているが、それに向けての訓練の場も神に給わってきたんだ」と考え、本来は、感謝してしかるべきなのです。⁶¹

ところが、私たちを取り巻いている現実社会は、そのように考えさせてくれるほど、私たちに甘くはないんですね。苦難の中のヨブが、見舞いの友だちからむしろ責め立てられて、「神を信じているのに、何でお前はそうなんだ。信仰を持っていながら、何でお前はそんな状態なんだ、お前の信仰ってそんなものだったのか」というような訴えや嘲りの幾多の棘に苛まれたように・・・。

そうなる私達は、神の真実よりもこの世の現実に、信仰の心が奪われていきます。「神様、どうか彼らにちゃんと説明出来るようにしてください。私をこんな目に遭わせないでください。」という祈りならぬ訴えに終始してしまうのです。そしてそんな訴えを吐き出した後、ふと我に戻りますと、「私はどこまで神様を信じていたんだろう。神が与えてくださった御約束をどこまで確信できていたんだろう。彼らにそう言われた時なぜ『あなたたちはそう言うが、神様は、私を確実に支えてくださり、救ってくださり、祝して下さっているのだ』と言い切れなかったんだろう」という自戒の念が迫ってくるのです。

この20世紀まもなく終わろうとしています、この世紀の歴史を改めて眺めてみますと、「神に任せ切れない、神を信じ切れない、そういう風潮がキリスト教国の中にさえあった」からこそ、世界に混乱があり、絶えざるいさかいがあり、様々な社会的問題が引き起こされて来たことが見えてくるのです。

ピューリタンによって建国されたアメリカで、今、どっちが大統領になるかという醜い争いが繰り広げられている。聖書に手を置いて大統領に就するというのに「なぜ、信仰がそこに出て来ないのだろう。なぜそこで聖書の権威が無視され、自分たちの頭の中での計算だけで互いに主張し続けているんだろう、何故このことに決着がつくよう膝をかがめて神の前に祈る、そんなことができないんだろうか」と切に思う。敵に勝たせたくないという思いだけで、相手を裁判にかけ、色々なこともやっているわけですね。その状態にもはや米国民も辟易しているけれども、「国を挙げて、悔い改めの祈祷会をやった」という話、聞いたことないですよ。

ここで国中が悔い改めたなら、アメリカはもう一度ピューリタニズムによって立ち上がった国に戻れるだろうと思うのです。神が私たちに折角与えてくださった御恵みや御言を忘れてしまったから、こんな羽目に陥っているんだと、この20世紀の終わりに神は気づかせようとしてくださっているのに、彼らはその御声を聴こうとしないのです。

そのように、他所の国がやっていることはよく分かるんですけどね、自分たちはどうかというと、同じなんですよ。「神の御声を聴いて本当に皆が悔い改め、神が立てられた御約束、大きな御恵み、決定的な私たちの御救いを、本気になって信じ、その確信に立って新しい世紀を迎えさせてくださいという祈りが本当に生まれて来なければ、20世紀を超えた教会が、お祭り気分でキリスト降誕2000年を祝っても意味がないんじゃないか」と私は強く感じるのです。

ここで再び私の脳裏にアブラハムが登場してきます。決して順調で祝福された生涯を終えた人ではなかった彼にとって、神の約束だけが真実だったんですから、それが反古にされるはずがないんですね。他のものに寄り頼んで何とかしようと考えても、意味を持たないことを彼は知っていましたから、「神の約束という真実は、必ず何時か何処かで陽の目を見る日が来る！」という確固たる信仰が、常に彼の裡にはあったのです。

でも私たちは、と言うと、自分の目の黒い内にそれを見ることができなければ、「ああ、神の約束は反古にされてしまった・・・」と落胆する人が多いですね。

「この私を『今ここに』生かしてくださろうとした神の御計画は、私が知らない遙か彼方の昔から神によって定められていて、その『今』を私は生きている。だとすれば、この私を用いてくださるという神の約束の御恵みは、私自身の領域を超えた神の御支配の領域では既に成就されているんだ」という信仰が、本来の<信仰>なのです。

アブラハムにまだ後継ぎがなかった頃に、神は約束の嗣業の地を与えてくださると仰ったのです。「あなたの目に見えるところを東に西へ、南に北へと歩き廻りなさい」と。私だったらそんな話には、てこでも乗らないですね、子どもがいない、相続する者がいないのですから、いくら歩き廻ったって全くの無駄骨です。

でも、彼はてくてく、てくてく歩いたんですね、本当に広い広い領域をひたすらに。神が祝福の中に置かれる領域と信じて、彼は歩き続け、そこを廻り続けたのです。それは「その地を受け継ぐ子どもが必ず与えられるという御約束への確信」が彼にはあり続けたからなのです。そういう思いが行動につながるものが、<信仰>なのです。

今、可能性があるとかないか、或いは、相対的にどれは成り立つことだとか、神学的になにが正しいとか、論理的にどうだこうだとか、そんなことは問題ではない。「神が告げられたことだけが正しい。誰が何と言おうが、みんなが馬鹿だと言っても、そんなこと信じるお前は奇怪しいと言われても、或いは、神学的にそんなことはあり得ないと否定されても、『それでも、神が告げられたのだから、信じる!』」それが<信仰>なのです。

この辺のレベルになると、やはり私たちは「人間の知恵」という厄介なものを引きずっていますから、それが引っ掛かってくる。神の約束の信憑性、真実とは何か、神学的に議論してみようとし始める。神ではないから解るはずがないのに、よく議論をします。そして、これこそが神の真実なんだと、何らかの結論を提示し始める。

ところが、そこで静まってよく熟考してみると、実はこれこそが「私たちが求めていた事柄、欲しいと願っていた事物」であって「神の御心、神の真実では決してなかったこと」があり得るのです。聖書が私たちに告げている御言と、私たちが現実にも求めている聖書信仰とは、時に大きなずれが生じるのです。「私が納得できた、私が信じられた、私がそう思えた、だからこれが神の真実なのだ」という、思い込みの勘違いが多々あります。

けれどもアブラハムは違います。「今はそう思えない、現実はそうではない、でも、神様が告げておられてきたんだから、それは、まぎれもない真実なのだ」と。それが今日のテキスト箇所の中では、「その実現を、現実世界では捉えられないで、彼らは死んだ。」という形で出て来るのです。御約束が果たされない中で死んだのですが、死の間際まで彼らは「御約束は成就する」と信じていた。

何故なら「この命を支えてくださった神がこの私に約束してくださったことは、私の短い命の期間を越える大きな大きな神のスケジュールの中で確実に成就するのだから、私の二代目三代目、或いはもっともって後代になっても、確実にその御約束のバトンは引き継がれ、いつかはテープを切るんだと信じていた」からなのです。そういう＜バトン信仰＞がなければ、私たち個人の信仰は、その人生限りの乏しい情けない、何も確かなことがないものとして終わってしまいます。

今日、この会に加わっている村上さんが属される「友の会」で、大変意欲的に活動参加して来られた93歳のご婦人が亡くなられ、今日のご葬儀なのですが、その井上さんは、ふた月に一度この聖書研究会にも出席され、聖書のお話が終わって話し合いの場になると、いつも感謝のお話をしてくださった、色々なことを神への感謝に繋げたお証しをしてくださったのです。

「神様は、この私が地上で様々な苦しみを受け、色々な試練に遭ったことをすべてご存じで、それ以上の御恵みで私を支えてくださった。私は子どもたちのために一生懸命働いたけれど、その苦勞以上に神様は子どもたちを憐れんでくださり、子どもたちに信仰を与えてくださった」と、とても喜んでいらっしやう。病気で倒れ足が悪くなり歩行困難になられたけれど、リハビリで回復なさり、また集会に復帰されることを繰り返された。その方の信仰は「死んだらおしまい」という信仰ではない。「私の命を神様が永遠に保障してくださったと同じように、私の子どもたちの命も永遠に守ってくださる、私を神の民にしてくださったように、私が今祈っているすべての人もやがて神の民にしてくださるでしょう。神様が仰ったんだから間違いはない」という信仰を抱いて生涯を歩み通された方でした。本当に清々しい信仰を持ち続けられたと思います。

アブラハムにしてもまさにそうなのです、「自分が死んだらおしまいだ」とは思わない。もっと極端なことを言えば、「神の奇跡の御業としてたった一人与えられたイサクを、神の御前に犠牲として献げても『自分の子孫は尚も神によって約束されている』と信じ切れたからこそ、モリヤの山でイサクをお献げすることを受け入れられた」のです。そこまでの篤い<信仰>が、かつての私たちキリスト者にあるだろうか！

私はよく「イサクを献げる」という箇所を、献身というテーマで礼拝説教することがありましたが、その時私自身の中で「イサクを献げても、神はアブラハムに尚も子孫を与えてくださる」という確信が今ひとつ持たなくて、だから「神はイサクをアブラハムに返してくださったのです」という結論で、お茶を濁してしまってきたわけです。でも、聖書の本論は本当にそうなのかな、と私の思いは、いつもそここのところで揺れていました。

神と取引する、神を試す、そんな気持ちでアブラハムはイサクを献げたはずはないんです。真顔で彼は「自分のいのちなる独り子を献げた」のです。だからこそ、神は彼の<信仰>を義しとして受け入れられ、「御告げ」とは全く違った逆転した結論を引き出してくださった。これこそが、<信仰>によって神様との間にこういうことが起こり得るという「歴史的な証拠」なんです。

もう絶体絶命のところ立たされた時にも、神はそこに<信仰>を認められることによって、告げられてきた事態を逆転せしめてくださり、その事柄全体がむしろ神の祝福と信じられるように導いてくださることがあり得るのだ。それこそが敬虔なる者の証しであって「神に忠実であれば、献げたものは返されるよ」という交換条件の約束事のような話ではない。しかしながら、どうもそのように、あの場面を読んでしまうことが多いのです。

「無私の信仰で献げ切らなければ、神との御約束は本当の意味で到達、成就することはない」のです。だから、そういう意味では、「信仰とは何か」ということを謳っている⑬節から⑯節までの聖句は、私たちにとって様々な意味で「あなたの信仰はどうですか」と問い迫られてくる箇所であると言えるのではないのでしょうか。

第⑬節、

この人たちは皆、信仰をいだいて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。遙かにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。

「この世で成功したり、皆から認められたりする必要はなく、世間の人には振り向かれない一人の旅人であっていいのだ」そのように、彼らは神の御前に清々しく生き貫きました。この部分の解釈というのは、色々な意味で色々な事柄を問いかけている部分だと思います。

例えば、今の日本の国の政治の中で、本当にキリスト教の持っている道理が徹底的に我国の中で遂行されるように、願い祈り求めて行かなければならない現実があるわけです。

けれども「それができなかつたら、私たちの信仰は駄目だ」というのではない。それぞれ、地上における今の段階で実現されなくとも、そのことを祈り求め続けてゆく過程で、神は常にそのことに耳を傾け続けてくださり、然るべき時に至らば、神の偉大な行為が、正義が、公平が、確実に遂行されるのだという信仰をもって、そうした事柄に取り組んで行くことが大事なのです。

時々、国会の中でそういう祈りを合わせている「国会祈禱会」があるのですが、そこに集まる方が私を含め10数名なんですね。今、クリスチャンの国会議員も全部で18名しかいない、ひと頃36名いたので、丁度半分になったわけです。その18名中でも集まってこられる方はほんの僅かで、後は、国会の中で本当に神の政治が行われるようにと祈り求めている外部からの人たちが集まって祈っているわけです。だが、そういう「一握りの人々」の中ででも祈り続けることが許されているという現実は、「神がこのことを大切に考えてくださり、そして、神の御約束が必ずやこの国の政治の中にも実現してゆくという神の保障なんじゃないだろうか」、そんなことを信じ考えながら、私はこの祈禱会に連なり続けているわけです。（この祈禱会を最後までリードされたのは松山先生でした。必要な国会デモには「祈りながら」参加された。デモの隊列に加わるのではなく、ただ一人国会の前に座して祈られたのである。デモ排除隊はこの非暴力の牧師の扱いには難儀したという。松山幸生先生は行動する人であった。ヘブライ人への手紙に現実に応答された人であったと私は思う。）

色々な意味で私たちは試されます。「こんなところでボソボソと祈っていても駄目じゃないだろうか、もっと国民全体にこの問題を大上段に構えて、訴えかけていかなければならないのではないか」という気持ちに駆り立てられることもあります。が、聖書にはそうではなく「信仰者とは元々よそ者であって、昔から皆に阻害されゆく存在なのだ」と書いてあるのです「よそ者、旅人、寄留者だ」と。だとすれば、皆に重きを置いて見てもらう必要はないんですね、神に我々の祈りをお届けさえ出来れば・・・。

「寄留者だった、よそ者だった」ということは、旧約時代だけがそうだったのではなく、新約時代になってもそうなんだということの一つの証しが、「旅先でイエスが生まれられた場所」だったのです。その町には彼らの戸籍はあったけれども、親類縁者はいなかった。だから彼らが泊まるべき家はなく、当時の風紀乱れた宿屋は避けて、何とか最後に辿り着いた家畜小屋で（今で言えば「ホームレスのダンボール小屋」で）、イエスさまはお生まれになっているんです。

ですから、『飼い葉桶の中のイエスさま』という題で説教すると、教会の人たちは喜んでくれますが、『ホームレスの小屋のイエス』と看板に真実を書いたら人が集まらないと思います。そのようなことが起こってくるのが、私たちの「礼拝の場」であり、聖書は、この世の本当の信仰の姿だと言うのです。誰もが関心払ってくれない、誰もが見てくれない、誰もがそのことに対して心に向けてくれないということを、100%はつきりと、イエスさまがご降誕なさった〈場所〉が示しているのです。

だから「信仰がこの国の中心になれば・・・」などと夢見る必要はなく、当面「よそ者」でもいいんです。但し、その「よそ者」の主に在る歩みが、この国の人びとの心を変えて行くのです、関心を寄せない人びとをも変えてゆくのです。そこに<信仰>のものすごさがあるのです。（このことは、古代ローマ帝国の大迫害下、信仰者の刑死の姿に感動した市民のうねりにより、とうとうキリスト教がローマ国教となった真実が物語っています。）

イエスは自分の故郷ナザレでは重んじられなかったと福音書の中に出て来ます。昔馴染の住民であるヨセフ・マリア夫妻からメシアなど誕生されるはずがないと。けれども、イエスの奇しき癒しの御業や、御国につながる新しき救いの教えが人びとを魅了、驚嘆させ、「イエスはメシアかもしれない」と感じるようにさせていき、更には「イエスさまはメシアだ」と信じる方向へ向かわせていったのです。何故なら主イエスの言行、主イエスの歩みそのものが、神の御言に符合し、まさに聖書の預言通りのメシアであられたからです。しかしながらイエスは、正真正銘の「御言なる神の御子」であられ、御自分がお書きになった聖書の御言通りに生きられるのは当然であられます。ですからイエスには、御自分を「我こそはメシアなる神」と人々に無理矢理信じ込ませる必要もありませんでした。

ところで、わが神を「信仰し続けること」これが実に大変な事柄なんです。何か素晴らしい出来事があって一時的に信じて燃え上がることはあっても、それを維持、継続させ、常に神への熱い思いをたぎらせ続ける信仰を保ってゆくことは、容易ならざることです。信仰のそうした側面を、聖書では色々な場面で象徴的に描いています。例えばミディアンの野でモーセが羊を飼っていた時、彼の足元の柴が燃え上がり、それは幾ら燃えても燃え尽きなかった。燃えて、燃えて、燃え尽きない、それが神の御恵みであり、神への信仰なのだというひとつのサゼッションがそこに出てくるわけです。

そうした信仰の歩みの途上で、私たちが倦み疲れてしまうのは、自分の思い、自分の力でそれをやろうとするからなんです。神様がなせるままに身を委ね歩んでゆけば疲れません。「神を信じる者は鷲のように翼をはって天を駆けめぐる。歩いても疲れず、走っても疲れることはない」そういう風に詩人は歌っていますが、どうも私たちは歩く先から疲れ、走らない前から折れてしまっているケースが案外多いですね。何故なら「神に対する信頼よりも、私自身がやらなければという構えが重い」からです。そう思ったとたんに疲れ、折れてしまうのです。

私などは構えずに神様にお任せし、神様がお使いされ易いように動いてゆけばそれでいいのではないかと考えるんです。身構えますと疲れますから、身構えません。ただ、神様のお声を聴き、神様の言葉に従ってゆこうと思う時には「祈ります」。

そういう祈りの御恵みが与えられますね。静まる、神様の御声を聴く、そうすれば神様が『御力』を注いでくださって用いてくださるだろう、その御力に身を委ねて歩めば、それでいいんだって考えますとね、そんなに片意地張りませんから、疲れません。73

そういうことが、神を神として受け止めて行くことに繋がり、神の御業を私が代行するのではなく、神がこの私をお使いになって御働きくださる、そういうチャンスをお供

することなのだ。神に用いられて生きてゆくのですから、神の御都合で私が必要なくなったら、捨てられても構わないんですよ。

最後まで大事に保ってもらわなければ困るという私への義務も責任も神様にはないので、もっと神様が使い易い素材があつたら、そつちに乗れ替えられたって私は一向に構わないのです。私にとっては「それでも私は神に用いられてきた」という喜びは残ります。その確かさだけは私の中に残る。だからと言って、神がこの私を用い続けなければならないという必要性はさらさらありません。

でも「神様の御前に私は、神様が私の命を召される時まで従って行きます」とは申しあげているのです。あくまで牧師として従って行くわけじゃなく「私は、神の御許で従い続けます」という宣言ですから、それはそれでいいと思うわけです。⁷⁴

第⑭節から⑯節前半、

このように言う人たちは、自分が故郷を探し求めていることを明らかに表しているのです。もし出て来た土地のことを思っていたのなら、戻るのに良い機会もあったかもしれませんが。ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。

ここでは、言い換えれば「自分が身を置くべきところ、自分の住まい、それをこの地上に彼らは求めていなかったのです」と書いてあるのです。

「もしも、彼らが住んでいたハランの地が恋しかったら、何時でも帰ることができたでしょう。でも彼らはその道を選ばなかった。もはやそこが故郷だとは思わなくなっていたからです。むしろ彼らが求めていたのは『天の故郷』だったのです」と書いてあります。

天の故郷、まあ一般的な言い方をすれば『天国、神の国』と言うことで、結局はこの地上では私たちは旅人として歩んでいるのであって、『私たちの国籍は天にある』のです。「天国に私たちは憩うべき場所を持っており、地上でどんな風に扱われようとも、私が帰るべきところは、そこにあるのですから、もう、こんなところでモタモタ、イジイジする必要はないのです」と、そのように言っているのです。

この『神の国』、もっと別な言い方をすれば「父なる神が住んでいらっしゃる場所」それが『天国』です。その意味では「場所ではない」のです。そうではなく「神の御支配が行き届いているところ、神の御支配のみが重んぜられているところ」そういうところが、『天国』と言われるところなんですね。

ですから、そこにおいては、自然災害であるとか、複雑な人間関係であるとか、社会問題であるとか、更に、名誉であるとか、地位であるとか、財産であるとか、そういうこの世で重要視されている様々な事柄ではなく、神の御約束は神の御許で既に確実に成就されているのだという＜信仰＞だけが、天国、神の国を目指すモチベーションとなるのです。⁷⁶

1999年以来、世紀末とか、ミレニアムとか色々なことが言われていますね。

今はもう終わりの時なのだ、新しい時代がやって来るのだと。しかし「新しい時代って何なんだろう。いったい誰が、新しい時代を作るんだろうか」と考えてみますと、そのことを期待している私も、そのことを期待されている世の中も、基本的には変わっていないんです、継続しているだけなんです。

継続の中で新しさを求める。けれど「継続」は新しいことではない、むしろ「断絶すること」が新しくなることです。ところが世の中は、断絶を恐れて継続を求めるのです。

もっと別な言い方をすれば、「革新的に生きることは難しいから、保守的に今のままでいいという生き方を続ける。『創造主である神を信じることができない日本人』にとっては、それが彼らには一番都合のいい方法で、ある意味、安全策なのです」。

だから恐らく、何回選挙繰り返してもこの国は保守的だと私は思います。保守政党が勝利し続けるだろうと思います。何故なら、変わられることは怖いことだからです、先が見えないから。何とか先に見えることが段々実現して、良いものがその周りに沢山付着していってくれば何とかやってゆけるよ、という考え方の中でしか生きて行かない。

「思い切って、今あることを全部変えてしまう、悔い改める（生き方自体の方向性を地から天へと転換すること）」は、怖いことなのです。だから、悔い改められない。結論として「悔い改めないで新しいもの求めたって、新しくなりようがない」のです。⁷⁸

ところが、アブラハムたちは断絶を恐れなかった。「私の命が断たれても、神の約束は成就する。この希望の拠りどころが今は断絶されてしまっているけども、神の約束は生き生きと成就されてゆく。だから断絶を恐れない、挫折も恐れない。絶対ピンチに陥るなんていうことはない。神は約束してくださった以上完成させてくださる。私が見られるか見られないかは問題でなくて、たとえば私が見られなくても約束は成就するのだ。」と。

でも「天を望んで生きるということ」は、この世での営みはいい加減でいいと、何となくすっぽかすことではないのです。日々の一步一步がやがて神の国に私たちを導く道のりなのです。私たちは既にこの世の思いを断たれているのです。パウロの言葉を使えば、「十字架によって、この世に死んで新しいキリストの命に生きること、肉に死んで霊に生きること」なのであって、これは断絶なのです。だから変革が起こる、新しくなる、革新が生まれることになるのですね。「神の国を待ち望む」という生き方に変えられるのです。

今は丁度アドヴェントです。「キリストの降誕を待ち望む」という時は「他にはもう望みがないから、それだけにすべてを集中して期待する」ということであるはずですが。ところがどうも教会のアドヴェントは、これだけに期待を賭けて、すべてを捨ててキリストを待ち望むという事柄ではないのです。「あれもこれもそれも、何となく事がうまく進んでいけば、もっと素晴らしくなるんじゃないかな、キリストをお祝いすることによってもっと私たちは喜べるんじゃないかな～」というような思いで、何となくアドヴェントを迎えているのではないのでしょうか。⁷⁸

外には絶対に頼るべきものが無く、このことにしか望みが置けないから、私たちはそのこ

とにすべてを賭けて「主の御来臨を待つ」という、この世に対する訣別、そのような緊迫感、切実感が殆ど無いのです。「この世も何とかなるだろう。案外これだって捨てたものじゃないよ」というような思い込みが色々なところに拡がり漂っていますから、そのような邪魔が入ってきて「キリストが来なくなつて、クリスマスは来るよ」と『なる』のです。

これを踏まえると「キリストがいなくなつてキリストを礼拝できるんですよ」というところまで『ゆく』のです。その理由は何と『私がキリストになっているから』です。

そこで言うキリスト礼拝とは「自分を礼拝すること」なのです。創世記で、あるいは申命記で「神以外のものを拝むな」という神の戒めを頂いているのに、「礼拝だ、クリスマス礼拝だ」という名目で、一番神がお嫌いになる偶像礼拝をしてしまうのです。そういうことに対する「畏れ」とか、或いは「自分自身に対する深い罪の意識」という霊的危機管理が欠落したまま、神の国を望んで生きることをしようとしなない姿があるのではないか。

「21世紀はどんな世紀になるでしょうね」と平気で言える無神経をもった信仰生活がまかり通ってしまう。「キリストは明日おいでになる」という讚美歌が「讚美歌21」にあります。「もし、明日キリストが再臨なさったらあなたは救われますか」という問いが私たちに向かってなされている。それが真の「アドヴェント」なのです。

正にこの「神の国を目指して生きる」ということは、「私の力で神の国に入るのではない。神を信じたのも、私の力ではなく、神がこの私を選び、この私を召し、この私を愛し、この私を救おうと目論んでくださったから、私は救われているのだ。あの御方による以外にすべての根拠はないという生き方をすること」です！

それは何も、天国行きの切符だけを握りしめてひたすら迎えの車を待つことでもない。「あのイエスという御方がこの私を覚え、この私を愛し、この私に目を注ぎ、この私を支えてくださって、神を信じる群れの中に住まわせてくださっているのだから、私は神を信じているのだ」という生き方をすることなのだ。

私の中にそれに相応しい何かがあるわけではない、神が一方的にこの私を憐れんでくださったから、神が一方的にこの私に目を注いでくださったからなのだ。そういうことがここで言われているのです。それは、あの人、この人という、人ごとの問題ではないのです。

聖書はその意味では厳しいです。ペテロはイエスに選ばれて「わたしについてきなさい」と言われた時にヨハネの方を向いて「あの人はどうなのですか」とイエスに問うた。イエスは「あの人のごときは、あなたにはどうだっていいんだよ。私とあなたの関係は、私たち二人にしかない関係なんだから、私があの人に何を望もうと、あなたとの関係には全く影響ないんだよ」と。信仰とは得てしてそういうもの「一対一、人格対人格」なのです。

教会に集まった人は皆同じ音で「あ」と言わなければいけないとか、同じ具合に口を開いて「う」と言わなければいけないということは絶対ないでしょ。違っていいんですよ、違っていいんですよ、承知の上で受け入れ合っている仲間なんですね。そういう仲間であれ

ば、その人びとの目的は、単に皆が仲良くするという次元ではなく、神が与えてくださった約束に対して間違いなく信じ貫いてゆけるように、お互いが祈り合い、支え合ってゆけるような群れでなければならない。

「わかり合っている」神の前に立った時、そんな言葉でスルーすることは赦されないですよ。「あなたはあの人の生き死にまでも責任負いますか」と問われるわけですよ。生き死にだって、ただ単にこの地上で死んだことを意味しているわけではないですね。「永遠の滅びにその人が落ちたとしても、あるいはあなたが神の国に入ったとしても、あなたはあの人に対して深い愛をもって執り成し続けてゆけますか、最後の土壌場までその人の魂を憐れんでゆけますか、支えてゆけますか、担ってゆけますか」という問いが、お互いに愛し合うという問いの中にあるんでしょ。そうやって来ると「死んでから後まで保証できませんよ」と言うんだったら、教会の真の交わりとは違います。

神の国に最期に導かれてゆくその日まで、神の前に共にい続けましょう、立ち続けましょうという励まし合いが、お互いの支えによって成り立ってゆくことがなければ教会の交わりとか、信仰の交わりとは言えないだろう。その終わりの時というものをしっかり見据えて生きていなければ、信仰は信仰ではなくなるだろう。この「神の国を目指して進んでいった」という言葉の意味は、「終わりの時に向けて絶えず心が開かれていった、思いが向けられていった、歩みが整えられていった」ということになるだろうと思います。

「そして彼らは、この地上における様々な美しさ、素晴らしさよりも更に優れた、言い換えれば、「この私自身が神の前に<神のもの>として受け入れられるというその素晴らしさの中に生きることができるといふ喜びの故に、その信仰の鍛錬を、困難の中で、艱難の中で、或いは逆風の真っ只中で耐え抜いて、生き貫いたのです」と書いてあるのです。

ヘブライ人への手紙を読んでいる限りにおいては「信仰は闘い」なんですよ。何故闘いなのかって言うと、私たちはよそ者であり、少数者ですから、誰からも受け入れられないんですから、受け入れられない現実の中で私たちが生きてゆくためには闘わざるを得ないですね。

ただし、その闘いは、相手を打ちのめす闘いではなく「相手を私たちと同じ神の愛の領域の中に導き入れるための闘い」なんですね。彼らが神に対して否定的に張っているバリヤを突き破って、神の愛をそこにまでも注ぎ込むためのサタンとの闘いなんです。そういうこの世での闘いを闘い続けること、それが<信仰>だと言っているわけです。

第⑩節後半、

だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいません。

「彼らの神と呼ばれることを恥としない」と宣言して頂くことができる道を歩いたので

す。これを裏返して言えば「神が恥とされる人はどういう人か」それは、不信仰に生きている人たちです、平気で偽善に歩む人たちです。神は神に対して正面から取り組み、神の前にへりくだることのできない人間を、恥とされる。

「信仰がなくては神に喜ばれることができない」と別な形で書いています。「恥とするということは神が喜ばないことをすること、信仰を持っている人間は神に喜ばれるのだ」という簡素な言葉だが難しいことが、この終わりのところにちょっと出て来るのです。

第⑩節後半の最後の部分、
神は、彼らのために都を準備されていたからです。

これも、単に「都を準備されているから」ではない、神が彼らのために既に都を準備なさり、「彼らを迎えようとしていらっしゃるから」です。

「あなたの住むべき住まいは、既に神の御許に御用意されているのです。御用意してくださった神の都の住まいに入れられるため、神を信じ続け、神を信じ抜いて行きましょう、それが信仰なんです。私たちが住むべきところが用意されていることを確信をもって歩んで行きましょう」そういう明るいメッセージの声がこの手紙第11章の⑬節から⑯節までには、聞こえて来るんですね。

「天国を目指して」という御言は、ある意味では非常に情緒的に美しい言葉に聞こえて来ますが、別な言い方をすると、ものすごく厳しい課題だとも思えますね、「それ以外のものを目指さない、目指してはならない」生き方なのです。でも「神が御用意してくださった『天のお住まい』以外は、私たちにとってはすべて『この世での仮住まい』であるわけで、天に私たちの本宅が確かに御用意されてあるのだから、それでいいのだと信じ、満足して、心安らかに生き貫いてゆくこと」なのです。

この世の中に生きている限りはやはり、いい思いやいい経験をしたいし、人から認められたいしね。いい人だと思われたいし、時にはあの人立派だと言われたいし、いい信仰を持っているなんて人から褒められもしたい、そんな気持ちが確かに奥底にあるのです。しかし、そういうものを求めている間は、真の天国を求められないのです。天国はそんなものとは関係ない、初めから価値観が違う世界って言っているんです。

天国で宝になることは「泥んこ」でいいのです。『土の塵を集めて神様は人を造り、その鼻から息を吹き込まれて宝の民となさった』と書いてあるからです。神の宝は、何ら邪気の無い『泥んこ』なのです、世に評価されてきたような素晴らしいものじゃない。神が宝と決めればそれが宝となる、宝を決めるのは私たちではない。そこにしっかりと私たちが根を下ろして歩んでゆく時に、神を信じて生きるという喜びを生きて行くことのできる者になるのではないかと思います。(2000年12月9日)

次ページから森容子先生特別寄稿の「説教」を記載します

「アブラハムの懐にいるラザロ」

ルカ福音書 16：19-31

森 容子

このテキストは、イエス様が語られる天国及び陰府にまつわるたとえ話で、ストーリー自体は寓話的と言えるかもしれませんが、そこから浮かび上がってくる「神の御目による真実の裁き」を、皆様と共に真摯にお聴きしたいと存じます。

⑱節から㉑節

ある金持ちがいた。紫の衣や上質の亜麻布を着て、毎日、派手な生活を楽しんでいた。この金持ちの門前に、ラザロと言う出来物だらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼の出来物をなめていた。

冒頭の「金持ち」という言葉は、ギリシャ語原典では「大金持ち、金満家」となっています。彼の衣服の「紫の布」は高級品で、特に「亜麻布」というのは最高級の生地ですが、彼はそれらを普段着として、毎日贅沢三昧の宴に興じ、まるで領主か貴族のような暮らしぶりを満喫していました。

一方、その金持ちの邸宅の門前に横たわっていたのは、全身が腫物に覆われている（ヨブ記の主人公を想起するような）ラザロと言う貧民。彼は、金持ちの食卓からのおこぼれのパン屑を当てにして生きていたのですが、彼の目下の望みは、「ああ、一度でいいから、お腹一杯パン屑を食べてみたいものだ」ということであり、犬がやって来ては、痒くてたまらぬ腫物を舐めてくれるのが唯一の癒しであり、慰めでもあるという毎日でした。（ヨブ記の主人公が全身の悪性の腫物を土器のかけらでかきむしり、妻に「神を呪って死んでしまいなさい」と言われるほど腫物と戦っていた日々とはえらい違いです。）

そしてそんな生活に浸かっていたラザロは、特段、苛立ちもなく、不平不満や自暴自棄も抱いていなかった様子です。以前の生活における功績や仕事ぶりも記されていません。

ここで不思議に思うのは、金持ちの彼には名前の記載がなく、貧民の彼の方には「ラザロ；神は助けたという意味」という特別な名前が記されていることです。しかも金持ちは、彼のラザロという名を知っているのです。名前とは、親の思いが込められているだけでなく、その人の人格や本性、来歴や御業等を表すとても重要なものです。

このことは、もしかすると金持ちが、自分は弱者への施しに長けた立派な人物であると世間にアピールするため、門前にわざと生活困窮者を置き、彼にラザロ(神は助けた)と命名したのかもしれませんが。毎日贅沢三昧の中から、おこぼれのパン屑を施してやっているだけの自分が、まるで彼の命を繋いでいる「生き神様」でもあるかのように・・・

②②節から②③節

やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによってアブラハムの懷に連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、アブラハムとその懷にいるラザロとが、はるかかなたに見えた。

アブラハムは「信仰の父」と呼ばれ、すべてのユダヤ人から大尊敬されている偉大なイスラエルの父祖です。世間から見れば、惨めの極みのような姿で息絶えたであろうラザロは、死後、天使たちに導かれ、なんとまあ、そのアブラハムの懷の中、そんな最上の特等席へ連れて行かれたのです。

方や、例の金持ちも亡くなり、彼のためには地上で大層立派な葬儀が執り行われ、さぞや豪華なお墓に葬られたことでしょう。ですが、その後は、これもまあ、陰府に下されて、そこで、数々の苦難、苦痛が、これでもかこれでもかと、いつ果てるともなく襲いかかってくる暗黒の世界にうごめいておりました。

まさに、この両者にこの世とあの世との大逆転が生じたというわけですね。陰府に下されて襲い来る苦難よりも、もっと悲惨なことは、自分のいる暗黒の世界から、輝かしい天国が垣間見られるということでしょう。そして、それ以上に残酷なことは、天国の方からも、陰府で悶え苦しんでいる自分の姿が覗き見られているのではないか、という怖ろしい危惧でありましょう。

元金持ちが、苦しみの極み、炎の海から、ふと、遙か彼方に見える天国に目をやると、何とそこには、あのラザロが、まさしく彼が、アブラハムの懷の中で幸せそうに微笑んでいるではありませんか！ 驚きとショックに打撃を受けた元金持ちは、「しかし、これはチャンス到来だ」と気を取り直し、やおらアブラハムに向って・・

②④節

そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、私を憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、私の舌を冷やさせてください。この炎の中で苦しくてたまりません。』

元金持ちは、僅かなパン屑を施してやっただけのラザロに、死後においてまで、「私はお前を助けてやったではないか」という恩義を着せ、天国にいる彼を陰府に呼びつけて、自分に仕えさせる権利があるとでも思っているのでしょうか。

それにしても、天国のラザロを陰府にまで呼びつけて、どんなことを頼むのかと思えば、「指先を水に浸し、私の舌を冷やさせてください」だなんて、随分ちっぽけな、つましい願い事ですね。でも「そんな軽い奉仕だから、ちょっとこっちへおいで」と誘ってにおいて、ラザロが本当にそこへ来たならば、自分が彼と入れ替わろうという目論見があったのかもしれない。

この元金持ちには、自分がなぜ陰府に墮とされて、今なぜ、猛烈な苦しみに遭わされているのか、元貧民ラザロとの間に大逆転が生じたのはなぜなのか、ということ深く考え

たり、自分の人生の来し方を振り返って反省したり、悔い改めたりという様子が、全く見受けられません。むしろ、何かの間違いか手違いで、こんな羽目になってしまったのだろうという被害者意識に近い感じです。ですから、天下のアブラハムにも全く臆することなく、大声を掛けます。

本来は天の御父が登場なさる場面ですが、ここではあえて寓話的なことを踏まえ「父アブラハム」となっています。が、そのアブラハムに「憐みを乞うのがゆるされるとき」は、彼が今炎の中で罰せられていることの意味を心に問い返し、そこに気づきが与えられ、深い悔い改めに至った後のことでありましょう。

それには、自分が犯し続けてきた元貧民ラザロへの蔑みや辱めという極めて薄情で残忍な仕打ち・・・それは、わざわざ邸の門前に彼を置いて晒し者にし、「ラザロ（神は助けた）」と呼んで、世間を欺く偽善を為し続けてきたという深い罪であり、それをきっぱりと認めなければ、何も、何事も、始まりません。

ですが、今や、元金持ちには、そんなことはどうでもよく、唯、アブラハムからのよき返事に、最期の期待をかけておりました。

②⑤節から②⑥節

しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出すがよい。お前は生きていた間に良いものを受け、ラザロのほうは悪いものを受けた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもたえ苦しむのだ。そればかりか、私たちとお前たちの間には大きな淵が設けられ、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこから私たちの方に越えて来てもできない。』

アブラハムは元金持ちに優しく「子よ」と呼びかけて、彼の頑なな心と耳を開かせようとした。そして、現世で良いものを受けていた元金持ちは、その分、来世では悶え苦しみが課され、現世で悪いものを受けていたラザロには、その分、来世では慰められると語りました。また、天国と陰府の間は行き来不能で、越えるに越えられぬ大きな淵があるということも・・・。

けれども、それは単に状況説明にすぎず、陰府における多大な苦しみとの因果関係が曖昧で、「自分が大金持ちだったことが、なぜ、そんなに悪いんだ」と彼は開き直り、十分な納得はできなかったでしょう。ですが、それが人間アブラハムが語れる限界であり、神の領域である罪の言及や、神の御摂理というところにまで踏み込んで語ることは許されませんでした。（また、この元金持ちにそれが語られたとて、この段階では、分かる相手とも思われません。）

②⑦節から②⑧節

金持ちは言った。『父よ、ではお願いです。私の父親の家にラザロを遣わしてください。私には兄弟が五人いますので、こんな苦しい場所に来ることのないように、彼らによく言い聞かせてください。』

元金持ちは、まだラザロを使う気満々です。陰府に遣わすのが無理ならば、現世にラザロ

口を遣わしてもらい、自分と同じように贅沢三昧に明け暮れている五人の兄弟たちが、死後に自分のような激しい苦痛に遭わせられぬよう、十分な忠告をラザロから伝達して欲しいと、アブラハムに懇願しました。

これも、元金持ちが自分の今の苦しい現状を、アブラハムの言うことを聞いて、生前の贅沢三昧とのバランスに特化していることを知ると共に、この機に及んでも彼はラザロへの仕打ちに謝罪しようという片鱗すらない態度には、まったく驚きあきれるばかりです。

②⑨節から③①節

しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死者の中から誰かが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』アブラハムは言った。

『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのならば、たとえ誰かが死者の中から復活しても、その人の言うことを聞き入れはしないだろう。』」

アブラハムの言う「モーセと預言者」とは、旧約聖書冒頭のモーセ五書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)と、預言者の書(イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、ホセア書、アモス書など)で、そこには、おもに、神の教えに従う者への祝福と、不従順な者への呪いが記されています。

ですが、今や、陰府の炎の海の中で呻いている元金持ちは、自分と同じ危機的な状況に近づいている五人の兄弟たちへ、「モーセと預言者の書を精読して、御言に聞き従い、悔い改めて、今の生き方を変えよ」などという悠長な忠告では間に合わないと、ラザロないし誰か他の死者の派遣を強く進言したのです。が、そんな勝手な言い分をアブラハムはきっぱり斥けます。

ここで肝心なことは、元金持ちが、「もう自分のことはしかたがない。陰府において課せられた『定め』を受け入れる他はない。自分が蒔いた種は自分で刈り取る他はない。」という観念した諦めの境地の一方で、「だが、せめて五人の兄弟たちだけは、何としても救われて欲しい」と強く願ったことです。

そのためには、聖書の御言に聞き、それを受け入れ、その御心に従って歩む以外手立てはないと、アブラハムに告げられた今、それを五人の兄弟たちに抜かりなく伝えてくれる人物を懇望したことでしょう。それはラザロでも、他の死者でもなく、本来の御言の伝道者なる人物が、五人兄弟其々に遣わされることです。それ以外に道はないのです。

神様が死後に、天国と陰府とに振り分けられることや、逆転現象というのは、アブラハムが告げたような、現世における不当、不条理と思えるこの世のアンバランス、貧富の差や幸不幸などに対し、死後に見事なバランスを取られる、憐みと知恵に富みたもう神様の特別な御計らい、ということだけでは説明はつきません。

むしろ、それよりも、この世では目に見えない神様が、あの世では審判者として、まさにありありと私たちの目の前に顕現され、そんな神様の御目だけが見通される人間の本质、それは、無垢、無我、無欲の聖き心をもって、神様をどれほどお慕いしてきたか、どれだけ神様にお委ねし、心からお従いして来たか、ということをお判断される神様から、ひとり一人へ下される厳正な御報いです。

これを、今回の（やや極端な）たとえ話に即しますと、元貧民ラザロの素な心、自分のからだを運命を抗わず、すべて静かに受け入れて、誰を恨むでも、誰を憎むでもなく、唯、おこぼれのパン屑と犬をお遣わしくくださる神様に日々感謝を捧げて生きた無垢で純粋な姿（この世では、恐らく殆どの方が望まないであろう姿）と、元金持ちの貪りと強欲の満たしと、偽善のゲームを日々楽しんで生きた姿（この世では、恐らく殆どの方が成功者と見做すであろう姿）、だがその穢れ切った姿とを、はっきり見定められて、其々にふさわしく裁定を下されるのが、神様の厳かで真正なる審判なのです。

そして、今日のこのところに、愛する皆様を招かれて、そのことを知らしめてくださったのも、他ならぬ、その神、主イエス・キリストであられるのです。黙祷致しましょう。

写者あとがき

私は、やっと「アブラハムの信仰」の門が見えてきたように思います。門の入り口まであと数歩の感じでした。遅い歩みでしたが恵の道を備えられていました。「分かる」ことは「変わる」ことである。行動が変わらなければ分かったとは言えない。厳しい教訓ですが道理です。微かながら確実な変化を感じる一年でありました。

今回登場する「井上さん（93歳当時）」のお話は松山幸生先生が一生懸命な語りに真に相応しい御方であり、先生も嬉々として語られたと存じます。（5頁参照）

又、ヘブライ人への手紙の著者が松山幸生先生ではないかと思われるくらいに著者と松山幸生先生が一体化していることも感じました。2000年を超えて私たちに迫ってくる「真理のことば」「救いをもたらす福音」「今なお生きているアブラハム契約」への希望を、この難解な手紙から学ぶことができる幸いを感謝しております。

今回も森容子先生とは5度に及ぶ往復書簡の交換をいたしました。歩の遅い私を暖かく支えてくださり、私には固すぎる食べ物を柔らかくして説明を加えて頂きました。その度に一つ一つが私の中で実ってまいりました。森先生は「ヘブライ人への手紙に学ぶの写書が終わった時のお互いの成長を楽しみにして進もうではありませんか」と励まし続けてくださっています。今回もシリーズに相応しい説教を頂き感謝でございます。

最後に余談をお許し願います。今回あることが閃きました。それはベートーヴェンの第九交響曲の合唱のところで、シラーの詩を引用してベートーヴェンが独自の意味づけをしていると思われる幾つかの箇所の一つに「恒星たちが天の荘厳なる意図に従って（何の疑いもなく、安心して与えられた）その軌道を嬉々として飛び交うように、英雄が勝利に向かって喜びを讃えてまっしぐらに走るように、あなた達もあなたに与えられた道を喜びに

満ちて駆け抜けよ。」というフレーズがあります。私は長い間、この英雄とは誰か、どんな人かを考え、イメージしてきましたが見当たりませんでした。今、私はこの「英雄」こそアブラハムではないかと想像しています。このように解釈することによって第九の合唱が一貫性ある意味を持ち始めると考えています。アブラハムがどの時代にも生きている一つの証しではないかとも思います。2023年6月10日